

ALACT モデルを用いた個別指導の継続観察が 教育実習生の指導の解釈に及ぼす効果について

○梶井芳明 (東京学芸大学)

木内綾香 # (足立区立梅島第二小学校)

キーワード：教育実習、個別指導の解釈、ALACT モデル

問題と目的

渡辺・岩瀬 (2017) は、「今日、大学での教員養成において、『実践的指導力』につながるものの育成が求められるようになってきている。また、その際、一定の指導技術や授業の信仰伝授にとどまらず、学生自身が経験の振り返りを通して学ぶ『省察 (reflection)』の役割が重視されるようになってきている。」と述べ、教員養成段階にある大学生に自己省察力を育成することの重要性を指摘している。

本研究の目的は、ALACT モデルを用いた個別指導の継続観察が教育実習生の指導の解釈に及ぼす効果を明らかにすることである。具体的には、実習生が担任教師の個別指導場面を観察し、指導意図を予想する。その後、実習生が担任教師に指導意図についてインタビューを行う。そして、実習生は、自らの予想と指導意図の比較、再解釈を、ALACT モデルを用いて行う。このような自己省察を繰り返す行いが、実習生の個別指導の解釈に及ぼす影響を明らかにすることを通して、実習生が ALACT モデルを用いて個別指導の振り返りに取り組む際の留意点を提案する。

なお、実習生の自己省察には、大学の指導教員のスーパーヴァイズを伴わせ、省察を契機にした学習を保障する。実習生 (当時) は第 2 執筆、指導教員は第 1 執筆にそれぞれ相当する。

方 法

調査対象者：都内公立小学校の第 1 学年を担当する中堅教師 (30 代女性) と、その学級に在籍する児童のうち、個別指導を要する児童 2 名 (A 児、B 児) の計 3 名であった。

調査期間：平成 30 年 9 月 25 日から 11 月 13 日のうち、観察を 6 日間、インタビューを 3 日間の計 9 日間であった (2 日間の観察に対しインタビューを 1 回行い、それを 3 度繰り返し行った)。

調査方法：観察法およびインタビュー法により、以下の 4 つの手続きで行った。1 つに、担任教師が行う A 児、B 児に対する個別指導場面を観察した。2 つに、観察した指導場面から、担任教師の指導意図を、第 2 執筆が予想した。3 つに、第 2 執筆が自らの予想をもとに、指導意図について担任教師に半構造化インタビューを行った。4 つに、第 1 執筆のスーパーヴァイズのもと、第 2 執筆が自らの予想と担任教師の指導意図を比較することにより、自身の予想を再解釈した。

結果と考察

実習生が個別指導に取り組む際の留意点：第 1 週目の留意点は、A 児及び B 児に対する指導意図の予想が、「A 児の行動の変化や成長」「A 児の気持ちの変化」「学習の定着を目的とした、A 児を含めた学級内の他の児童への影響を考慮した指導」「B 児の実態を踏まえた指導」であると示唆されたことから、児童の気持ちの切り替えや学習の定着を目的とした、児童の実態を踏まえた指導を提案する。

第 2 週目の留意点は、指導意図の予想が、「A 児の性格や体調を考慮した指導」「B 児のよい行動に着目した指導」であると示唆されたことから、児童の性格や体調を考慮しつつ、よい行動に着目した指導を提案する。

第 3 週目の留意点は、指導意図の予想が、「A 児の思考や行動を促す、担任教師の指導観を踏まえた指導への気づき」「長期的な視点に基づく、B 児の成長を促す指導への気づき」であると示唆されたことから、児童の行為や気持ちを促す、長期的な視座を伴わせた指導を提案する。

実習生が ALACT モデルを用いて個別指導の振り返りに取り組む際の留意点：第 2 執筆は、ALACT モデルを用いて、第 1 執筆のスーパーヴァイズのもと、自らの予想と担任教師の指導意図を比較し、自身の予想の再解釈を行った。

モデルの活用の様子から、Do (何をしたか) の内容は Think (どう考えたか、思ったか) の内容が、What (何がしかったのか) の内容は Feel (どう感じたか) の内容が、さらに、What (何がしかったのか) の内容は Do (何をしたか) の内容が、それぞれ根拠となることが示唆された。

これらのことから、実習生が ALACT モデルを用いて個別指導の振り返りに取り組む際には、「どう感じたか」という気持ち (Feel) が生じ、その気持ちが「何がしかったのか」という指導の目的 (What) につながる。さらには、その目的を達成するために「どう考えたか、思ったか」という判断 (Think) をして、その結果「何をしたか」という指導 (Do) に至るといった関連を留意することが重要であると推察された。

付 記

本研究は、第 1 著者の指導のもと、第 2 著者が、平成 30 年度に東京学芸大学教育学部教育心理学講座に提出した卒業論文の一部を、加筆修正したものである。